

龍谷大学世界仏教文化研究センター
設立記念シンポジウム

基調講演

韓日仏教交流 1500 年の記憶と未来

Jong-Ho Bark Mun-Gi
宗浩（俗名：朴 文基）

（東国大学校佛教大学長・佛教大学院長・宗学研究所長）

【要旨】

韓日両国の仏教が交流を始めてから、はや 1500 年になります。その間、韓日間は互いのやり取りを通して多くの交流を持ってきました。

飛鳥時代の聖徳太子や、行善の百済や高句麗仏教の修学、奈良時代の戒律・法相・華嚴宗における百済および新羅との深い交流などが、当時の相互交流の状況を示しており、これらの時代ほどではありませんが、平安時代は三国仏教の日本伝来と文献および思想的影響により、両国仏教の人情が互いに交差・交感する時代だったと見られます。室町時代から江戸時代にかけての時期には、韓日両国の仏教文献交流および流通は鎌倉時代以前に比べて顕著な減少を見せましたが、明治時代以後、進展した日本の近代的仏教研究は韓国の僧侶と研究者を通じて韓国の近代仏教学に多くの影響を与えたりもしました。換言すれば、古代から中世までは韓国の仏教が日本に多くの影響を及ぼし、近代以後には日本仏教学界の成果が韓国に影響を及ぼしたのです。

韓日両国の国交樹立 50 周年を迎えた今日、韓日相互間の理解と国際的水準での共同研究、仏教文化の活発な交流などが切実に要求されています。それだけではなく、社会問題に対する仏教的解決方法の提示や、痛みと苦痛を受ける人々の治癒のための共同関心と対処の努力が必要だと考えられます。

韓日仏教交流 1500 年の記憶と未来

宗浩（俗名：朴 文基）

はじめに

日本の龍谷大学において世界仏教文化研究センターが設立されたことをお祝い申し上げますと同時に、韓日修交 50 周年を迎え、センター開所式を記念するために開催されるシンポジウムで基調講演を勤めさせていただくことを光栄に思います。

本日のシンポジウムの主題は「仏教を通じた韓日文化交流の歴史と展望」です。そして韓日修交 50 年を記念して「共に開く未来」をキャッチフレーズとして、多様な記念事業が推進されていると聞いております。本日のシンポジウムでは、その一環として三国時代の韓日仏教交流、高麗大蔵経と韓日仏教交流、新羅の元暁と鎌倉時代の親鸞の思想的交感、朝鮮時代開花期の韓日仏教および現代の韓日仏教関係などが発表される予定です。

それぞれのテーマ発表は綿密な研究成果を土台として、韓日両国仏教の未来的ビジョンを提示することが期待されますが、私はここで交流という側面から韓日仏教文化交流のいくつかの重要な一面を、歴史的時間を遡って思い返し、これを解釈してみようと思います。また、このような解釈を通して、韓日両国仏教がより一層交流を推進し、共に作り出さなければならない未来の方向に関して、私の考えを述べようと思います。

日本に仏教が最初に受容されたのは、百済から伝えられた仏教が公認された 538 年のことです。ただし、これ以前に渡来人である司馬達等が仏像を安置して礼拝したという記録が伝わっているのを見れば、現在の韓日両国の仏教は交流を始めてから、はや 1500 年になります。

仏教が伝来した初期には、崇仏派の蘇我氏とこれに反対する物部氏に代表される貴族や大臣たちの間に、仏教公認について対立があったことは周知の事実です。結局、崇仏派の勢力拡大によって、百済からは寺院建築技術などが、高句麗からは鮮やかな色彩によって仏画を描く技術などが相次いで伝来し、日本はこれをいち早く吸収しました。このような事実は、720 年に編纂された『日本書紀』を始め、特に鎌倉時代に師錬が編集した『元亨釈書』や、凝然が著述した『三国仏法伝通縁起』などで確認することができます。

飛鳥時代 三国仏教の伝来と交流

仏教が伝来した当初には、当然僧侶が受戒できる制度が用意されていませんでした。これに対し、司馬達等の娘である善信尼と三人の尼僧が、588 年に百済に戒律を学びに行きました。以後、3 年経った後、尼僧たちは百済から帰り、日本仏教界に戒律の重要性を認識させ、戒律制度が次第に成立して行きました。この飛鳥時代は、仏教の本格的なはじまりの時期と見ることができます。

この当時、日本では傑出した仏教研究者が登場します。すなわち、日本で最も有名な仏教学者の中の一人である聖徳太子が活動したのです。聖徳太子は、百済から 595 年に到来した高句麗僧・慧慈と百済僧・慧聡を師として学びましたが、教理的側面では特に慧慈からの影響が強いと推定されています。聖徳太子は、一を習えば十を理解できる人でした。次の逸話は、聖徳太子の優れた能力をよく示しています。

推古天皇（在位 554-628）の時代に日本に渡って来た高句麗の慧慈は、聖徳太子の師となりましたが、太子は慧慈に対して、当時日本に伝わっていた『法華経』には一文字が抜けていると指摘します。これに対して慧慈は、高句麗本でもその文字が抜けていると答えます。これに対して、聖徳太子は禪定に入り、前世において自身が中国で見た『法華経』にはこの一文字が入っていたという事実を証明します。これは聖徳太子の能力を伝説で彩ったものと見られますが、聖徳太子が『三経義疏』を作り、『法華経』に深く関与した事実は、日本に仏教が輸入されて間もない状況において、日本仏教が両国の文化交流において能動的主体になったことを示すエピソードです。

これと関連して、聖徳太子が著述したと伝えられる『勝鬘経疏』に注目する必要があります。当時、日本は推古女帝が統治しており、彼女は仏教交流に深い関心を寄せていました。三人の尼僧が百済に留学できたのも、このような日本の政治事情に依っています。女帝と尼僧、この点において、勝鬘夫人が中心となる『勝鬘経』が日本で注目を集めることができたという研究もあります。これは他でもない、日本がすでに能動的に仏教を解釈し、自主的に受容したという証拠であり、もちろんそれは百済および高句麗との緊密な仏教交流の結果だと考えられます。

当時、朝鮮三国から日本に渡来した人物は多くありましたが、逆に日本から百済に帰化し、百済の朝廷で活躍した人物もいました。日羅がまさにその人です。日羅は、『日本書紀』によれば、宣化天皇（在位 535-539）の時に百済に渡った日本の官吏の息子であり、百済では達率という二番目に高い官職にありました。日羅は、日本の朝廷の要請で、敏達天皇 12 年（583）に日本に戻ることになりました。その時、日羅と聖徳太子との間にあった、次のようなエピソードが伝わっています。

当時、聖徳太子は一般人の服を着ていましたが、日羅は太子を指して「神人だ」と言い、更に「世の中を救う観世音菩薩だ」と言いました。日羅も顔から光を出し、太子も眉間から光を放ってお互い通じ合う優れた人物だったと描写された程に、二人は非常に優れた仏教者でした。もちろん、ここでは聖徳太子が立派な人物であるという事実が置かれています。しかし、日羅の活動に焦点を合わせれば、これは百済から仏教が伝来した直後の韓日両国の人的交流および文化交流が非常に活性化したことを知ることができ、その一環として活発な仏教交流を解釈しなければならないということを我々に教えるエピソードでしょう。

また、高句麗に留学した僧侶である行善をあげることができます。彼は高句麗に留まって仏教を習って法を求めましたが、高句麗滅亡後は唐に行き、719 年に船で再び日本に

帰ってきました。彼は高句麗に滞在した時、突然大きな洪水にあい、橋が崩れて船もなく、たった一人でしたが、心で観音菩薩を念じたところ、しばらくして一人の老人が小さい船を漕いでやってきて、彼を乗せて川岸に渡してくれたといいます。行善が感謝をしようとすると、老人と船はすべて消えており、彼はこれを契機に観音像を作って礼拝したので、高句麗では彼を河辺菩薩と称したといいます。行善は日本でも尊敬を受け、彼が持ち帰った観音像は興福寺に安置されたそうです。高句麗で彼が菩薩と呼ばれたことは、彼の人物と教化による高句麗への感化が、それだけ大きかったということを示しています。

奈良時代 三国仏教の伝来と交流

日本が都を飛鳥から奈良に移した710年は、朝鮮半島では高句麗と百済がすでに滅亡し、新羅が三国を統一して40年を越える時期ですが、以後新羅と北方の渤海が互いに対立し、それぞれ優れた仏教文化を形成することになります。

奈良時代には南都六宗の教学伝統が確立され、南都六宗の成立とそれ以前の朝鮮三国の仏教は非常に深く密接な関係があったことが、多くの研究によって明らかになっています。聖徳太子の師匠である恵慈と恵聡は、三論と成実論に精通した僧侶でしたので、おそらく日本の三論宗と成実宗はこの時から始まったと考えられます。また、後に百済出身である道蔵は『成実論疏』を著述し、後代に多くの影響を及ぼしました。この文献は不幸にも現存しませんが、百済から持ってきた教理知識と日本で得た知識を網羅して著述したと見られます。したがって、8世紀の日本仏教の学問的水準は、中国や新羅と比較しても決して遅れていなかったと考えられます。

一方、戒律宗は百済と関連が深く、法相宗は新羅と関連がありますが、特に日本華嚴宗の成立は新羅との関係を切り離して考えることはできません。日本華嚴宗開創の土台を作った審祥は、新羅僧というイメージで知られていましたが、最近では新羅に留学した日本僧という説が有力です。彼は、唐の華嚴学者・法蔵について修学した後、新羅で学んで日本にやって来たという伝承があります。彼は、740年に東大寺において日本で最初に『華嚴経』の講義を行いました。以後、日本では750年頃に智憬が法蔵の『華嚴五教章』の注釈書を著述するほど、教学に対する吸収が非常に早かったのです。この著述は残っていませんが、おそらく当時、新羅の有力な学僧であり居士である元暁の影響力が大きかったと考えられます。彼が元暁の『無量寿経宗要』に対する注釈を残したことからも、この事実を知ることができます。また、彼は華嚴学に博学な見識を持ち、新羅と中国の僧侶に対して批判的観点を持って注釈書を作ったと推定されます。このような傾向は、彼が著述した『大乘起信論同異略集』において、『命日論』を通して、新唯識である法相唯識学を批判する姿勢を示すことから読み取ることができます。これは一つの例に過ぎませんが、奈良時代には中国と新羅の仏教文献を積極的に、必死に研究して独自の仏教思想を形成してきました。

飛鳥時代から奈良時代にかけて、朝鮮半島へ留学に行った日本僧は少なくないと考えら

れます。これはまさに、韓日両国の仏教文化交流が非常に活性化したことを意味します。その中には中国へ留学したり、新羅に留まって新羅寺を通して帰国したりする僧侶も多数いました。ただいくつかの断片的な記録だけが伝わるだけであって、両国仏教交流の具体的実状を正しく知ることができなくとも、彼らは中国の先進仏教文化を新羅に伝え、新羅から再び日本に戻ることによって、唐・新羅・日本、当時の東アジア世界における仏教交流のメッセンジャーとしての役割を果たしたと考えられます。

平安時代以後の仏教交流と文献伝来

8世紀末から約400年間続いた平安時代は、記録上では飛鳥時代や奈良時代ほど韓日両国の仏教交流は活発ではなさそうに見えます。しかし、三国仏教の日本伝来と文献および思想的影響を基に、韓日両国仏教の人情が互いに交差・交感する時代だったといえます。まず、新羅仏教を代表する元暁の子孫である薛仲業が日本に使節としてやって来た際、元暁の『金剛三昧経論』を読んでいた日本の一真人が、薛仲業に対して元暁を賛える詩を書いたという記録が伝わっています。このことを契機に、新羅では9世紀始めに元暁の碑文である「誓幢和尚碑」が立てられました。このように、この時期には両国仏教の人的交感を通して、仏教文化の交流と伝承が成り立ったということが出来ます。

また、史料不足のために実状が窺い知れませんが、渤海僧が日本僧の弟子になったり、新羅僧が日本僧の著述を学び、思想的影響を受けて引用したりするほど、両国の仏教交流は絶えず続きました。渤海僧として日本と仏教交流をした者に貞素がいます。彼は日本僧の靈仙の弟子です。靈仙は、日本では唯一三蔵の称号を受けた僧侶です。彼は般若三蔵の訳場で『大乘本生十地観経』の翻訳に参加して筆受と訳語を担当しましたが、このことから彼が梵語に堪能であったことが分かります。彼の弟子である貞素は渤海使節と共に日本に来ましたが、日本の朝廷は彼を通して靈仙に対して留学費を送りました。靈仙はそれに対する恩返しとして、仏舍利一万などを、貞素を通して日本の朝廷に再び送りました。しかし、貞素が日本の朝廷の使いとして再び師匠を探して五台山に行った時、靈仙はすでに毒殺された後でした。貞素が沈痛な気持ちを込めて残した文と詩句は、円仁の『入唐求法巡礼行記』に伝わっています。韓日両国の仏教文化交流は、これら師弟間の人情を通してより一層深くなった様子を見ることができます。もちろん、これに先立って奈良時代に三国に求法留学をした僧侶の間でも、このような師弟間の深い人情があったと考えられます。

こうした事例のように、中国において韓日両国の間の仏教交流が頻繁だったと考えられます。これに先立つ608年に遣唐使として中国の長安に行った日本僧・日文の場合、632年に日本に帰国しますが、当時、隋・唐に留学していた高句麗僧・慧灌との交流も注目することができます。慧灌は日文と交流し、その交流の結果、625年に直接日本に行くことになったと推測する研究もあります。より一層確実な例は、先に言及した円仁が唐にある新羅赤山院に留まって、両国の仏教に対して意見を交換した事実を挙げられます。このような場合は、中国において日本と新羅間の仏教交流が成り立ったようです。

新羅僧・見登の著述による『華嚴一乘成仏妙義』において、8世紀末、日本の華嚴宗の僧侶寿靈の『五教章指事』が主な典拠として引用された事実がすでに明らかになっています。8世紀末、日本の華嚴学の水準は、その源流である唐や新羅の華嚴学と肩を並べる次元を越え、逆に影響を及ぼす水準に到達したことを示しています。

一方、平安時代末期には、高麗の王子出身である華嚴宗の僧侶義天（1055-1101）が、先賢たちの典籍を収集するため、宋・遼・日本などに手紙を書いて、仏教文献を大々的に求めました。義天が活動した11世紀後半は、東アジア世界において文献を通じた仏教文化交流が非常に活発だった時代です。

これは、人的交流と相互情報交流もまた、非常に活性化したことを意味します。たとえば義天が日本に手紙を送った後、その結果がどうなったのかが不明だとしても、おそらく多くの援助を受けたと推測できます。日本もまた、義天が整理した華嚴学関連の著述集成である『円宗文類』を通して、新しい文献に接し、研究することになりました。それだけではなく、1087年に完成した高麗の初彫大蔵経もすでに日本で大量に流通し、義天が刊行した教蔵文献とその目録である『新編諸宗教蔵総録』も日本に伝えられました。このように、韓日間の仏教文化交流は持続し、高麗時代、普照知訥（1158-1210）の文献も日本で流通して研究された事実が確認され、これら文献は鎌倉時代にまで影響を及ぼすことになります。

室町時代と江戸時代 朝鮮仏教との交流

室町時代（1336-1573）になると、大蔵経板を得ようとする日本側の努力が結実し、高麗時代の再彫大蔵経が日本に多量に流通しました。以後、江戸時代（1603-1867）には、両国の公式的な仏教文化交流を想定できないのが現実です。当時の朝鮮が、儒教を崇める儒教国家だったためです。もちろん朝鮮時代にも仏教は存続し、多くの寺刹で仏教信仰と儀礼、仏教書籍の刊行が活発に行われましたが、国家レベルの公式交流はもちろん、人的交流もまた非常に制限的でした。

ただし1592年の壬辰倭乱と、以後、国交交渉過程で義僧将・講和使として活躍した、四溟惟政（1544-1610）が、日本僧たちと交流した痕跡はあります。また、彼の師匠である西山大師清虚休静（1520-1604）の著述による『禅家亀鑑』が、1629年に日本僧自雲によって伝来し、1635年に初めて板刻されて以来、何度も刊行され、それに対する注釈書が日本でも出たりもしました。これは日本の臨済宗側の努力によるものですが、四溟惟政が媒介となったと推定されます。

一方、仏教と直接的な関連はありませんが、1607年に江戸幕府と朝鮮の国交が回復して以来、1811年まで200年余りの間、12回に亘って日本に到来した朝鮮通信使は、一種の文化使節団として鎖国時代における両国間の文化交流が持続したことを示しています。壬辰倭乱を通して、朝鮮の陶磁器と印刷術、医学と儒教などが日本に伝えられ、また朝鮮通信使を通して日本において印刷文化と茶文化が発達していることを朝鮮の人々が知るようになりました。そして、通信使と交流した日本僧の痕跡も探し出すことができます。

このように、室町時代から江戸時代には、韓日両国の仏教文献交流および流通が、鎌倉時代以前に比べて顕著に少なくなることになります。ただし、現在、東国大学校には『元亨釈書』の朝鮮改版本が現存します。東国大学校の前身である中央仏教専門学校および恵化専門に教授として在職した江田俊雄先生によれば、この本は1381年から1592年の間に朝鮮で改版され、研究されたといえます。その他に、19世紀中盤以前に朝鮮に輸入された日本仏教文献の例は、現在はこれ以上探すことができませんが、朝鮮と江戸時代の仏教の比較研究と文献発掘を通して、新しい史料と文化交流の様相を確認することができるようになることを願っています。

日本の近代仏教学と韓国仏教

文化は受容と流通を繰り返しながら、交流され、逆輸入されたりもします。特に、韓日両国の仏教交流がそうです。日本は明治時代以後、学問的に近代的な仏教研究が進展して、その研究水準は世界的水準に達し、今日まで驚くべき成果を蓄積してきました。これは、19世紀後半に成し遂げられたヨーロッパ留学を通して、梵語など仏教写本を渉猟し、西洋の人々が持つことができなかつた漢文原典読解能力を通して、西欧仏教学界の限界を越えることができたためです。近代日本仏教学界の最大の成果の一つは、『大正新修大蔵経』のような校勘本大蔵経を集成したことであり、これは明治時代以後に日本の近代仏教学が成し遂げた重要な成果でした。

しかし、私は浄土真宗西本願寺の大谷光瑞が中心となった大谷探検隊が成し遂げた成果こそ、仏教に対する情熱によって成し遂げられたものであり、日本近代仏教の誇るべき象徴だと考えます。もしかすると大谷光瑞が地理学者だったために可能なことかもしれませんが、これは巨視的観点で仏教東漸の歴史とその軌跡を探查する試みでした。また、未来の韓日両国の仏教交流の方向性を考慮する際にも注目しなければならない遠大な試みだったと考えられます。

近代に入って、日本は大谷探検隊から分かるように、世界的視野とそれに相応しい実力を持って仏教研究を遂行してきました。これは、西洋学界では不毛地と異なることがなかつた韓国仏教に対する研究成果につながりました。韓国仏教に対する近代日本学界の代表的成果としては、高橋亨の『李朝仏教』(1929)、忽滑谷快天の『朝鮮禪教史』(1930)を挙げることができます。また、大屋徳成は博士学位論文として『高麗統蔵雕造攷』(1937)を提出し、現在に至るまで、この分野の不朽の成果として残っています。その他にも、江田俊雄の研究成果を集めた『朝鮮仏教史の研究』(1977)、鎌田茂雄の『朝鮮仏教史』(1987)など、韓国仏教に対する多くの研究がなされました。そして、日本での韓国仏教研究の成果は、2000年に日本の韓国留学生が整理し、『日本の韓国仏教研究動向』という本を刊行したことがあります。

これと比較して、韓国仏教は朝鮮時代500年間においては非主流の位置にあり、近代期には日本の植民地になるに至って、仏教と韓国仏教に対する学問的研究を体系的に遂行で

きる条件がありませんでした。その上で、多くの僧侶と研究者が近代期に日本に留学して日本仏教学界の成果に接し、日本を通して逆輸入された近代仏教学の影響を受けて、学問の基礎を作ることができました。韓国では、仏教学は1960年代以後に本来の位置に戻ることになり、その過程でも日本の先行研究に力づけられること多かったことは事実です。

ただし、最近では韓国においても仏教学の水準が以前に比べて高まり、韓国仏教だけでなく、日本仏教に対する関心と研究も深まっていることは鼓舞的な出来事に違いありません。それは、交流というのは相互間の正しい理解と互惠平等の原則から出発しなければならないためです。今まで韓日仏教交流の歴史的記憶に対して時代別に言及してきましたが、古代から中世までは韓国の仏教が日本に多くの影響を及ぼし、近代以後には日本の仏教学界の成果に基づいて韓国仏教研究が活性化したことは否定できません。これは文化の受容と伝達、交流と流通、逆輸入と新しいビジョン創出の典型的事例でしょう。

韓日仏教交流の未来的展望

1965年、韓日両国は再び国交を樹立し、今年が国交樹立50年、更には解放（日本では終戦）以後70周年を迎える年です。その間、壬辰倭乱以後、再度国交を再開した朝鮮と江戸幕府の過去の記憶に比べて、より一層密接で多方面に渡る実質的交流の場が韓日両国の間に繰り広げられてきました。そして東国大学校と龍谷大学の間における定期的な研究者交流が始まって、すでに9年になりました。この時点で、韓日両国の仏教はどのような未来を準備し、展望しなければならないのでしょうか。

今日、龍谷大学の世界仏教文化研究センター設立記念シンポジウムを契機に、韓日両国の仏教交流の未来を今一度考えてみようと思います。

私はこの席で、学問研究と社会的還元という二つの次元で相互間の理解と国際的水準での共同研究、仏教文化の活発な交流が切実に要求されていると考えています。はじめに、研究分野においては、インド仏教と中国仏教から韓国と日本仏教の研究に至るまで、多くの分野で共通の理解に基づいた共同研究が可能だろうと考えられます。現実的に可能な研究分野をもう少し具体的に述べるならば、まず日本にある韓国仏教文献を共同で研究することを提案できます。

周知のように、日本は新羅から高麗に至る古代から中世の韓国仏教文献の目録および写本の最大所蔵先です。龍谷大学でも、新羅時代の撰述文献18種、高麗時代の撰述文献1種を所蔵していますが、これは日本で筆写されたり板刻されたりした韓国仏教文献です。例えば新羅の唯識学者である円測の『解深密経疏』写本、元暁の『大慧度経宗要』写本だけでなく、憬興、勝莊、義寂、表員、太賢、そして高麗時代の義天、了円の書籍、写本や版本が所蔵されています。また、朝鮮時代の仏教文献や20世紀始めに韓国で印刷・出版された文献も何種かあります。

現在までに成し遂げられた韓日仏教学者の共同研究でも、それまで知られていなかった新しい史料を発掘して、事実を究明するという大きな成果をあげました。例えば、長い間、

法蔵の著述として知られていた『華嚴経問答』は、日本の華嚴学研究者である鎌田茂雄先生、吉津宜英教授、石井公成教授、韓国・東国大学の金相鉉教授が互いに学問的交流を成し遂げ、結局、新羅の義湘の華嚴講義録だと判明しました。また、東国大学の崔鉉植教授も同じく、先の研究者との交流を通して新羅の見登の『起信論同異略集』が、実際は日本僧の智憬の著述だと確定できました。この他にも多くの事例があるでしょうが、今後共同研究を通して、仏教の歴史と文化、思想と修行など多分野にわたる新しい地平を開けると考えられます。

このように、一次的には、文献書誌学や思想史的に重要な意味がある日本国内の韓国仏教文献を、韓日研究者が共同で研究していくならば、これは仏教の新しい未来を開く重要な第一歩だと考えられます。そのためには、日本所在の経論の写本と韓国にある刊本との厳密な比較研究が必要であり、今日のシンポジウムにおいても、これに関連する発表があると聞いています。今回のシンポジウムを契機に、相互共同研究がより一層進展することを期待しています。

そして、仏教の社会的還元の側面で述べるならば、日本仏教界は数年前に起きた不幸な大地震の被害者の方々を慰め、傷を癒やすため、社会的活動に積極的に参加していると聞いています。韓国でも、最近では人間の幸福、心の治癒、人材の提供など、仏教ができる社会的役割に対して関心が集まっています。すなわち、人々が苦しさを忘れて心の安定と幸福を得ることができるよう、長い歴史を持つ仏教修行と治癒の伝統を、積極的に社会に還元しなければならない時代にきています。社会問題に対する仏教の対応方法、人材の社会的還元に対しても共通の関心を持って対処して準備するならば、これは世界仏教の潮流を先導する深い意味を持つことになるでしょう。

今日、二つの大学間の長い間の縁を基盤として、仏教交流 1500 年の意味を述べることができ大変嬉しく思います。今後、韓日両国仏教界と学界、延いては東国大学と龍谷大学が力を結集して、1500 年間の絢爛たる仏教交流の記憶を今日に蘇らせ、新しい未来を力強くひらくことができるように祈り、基調講演を終えようと思います。長時間傾聴いただき、ありがとうございました。

(翻訳：赤羽奈津子)

한일 불교 교류 1500 년의 기억과 미래

宗浩 (이름 : 朴 文基)

(동국대학교 불교대학장 · 불교대학원장 · 종학연구소장)

【要旨】

한일 양국의 불교가 교류를 시작한지 어언 1500 년이 되었습니다. 그동안 한일 간에는 서로 주고받으며 많은 교류를 가져왔습니다.

아스카 시대의 쇼토쿠(聖德)태자나 교젠(行善)스님의 백제나 고구려 불교의 수학, 나라시대의 계율, 법상, 화엄종의 백제 및 신라와의 깊은 교류 등이 당시의 상호 교류 상황을 보여주고 있으며, 이들 시대만큼 아니지만 헤이안시대에는 삼국불교의 일본 전래와 문헌 및 사상적 영향으로 양국 불교의 인정(人情)이 서로 교차 교감하는 시대였던 것으로 보입니다. 무로마치시대부터 에도시대에 걸친 시기에는 한일 양국의 불교문헌 교류 및 유통이 가마쿠라시대 이전에 비해 현저히 줄어들었지만, 메이지시대 이후 일본의 진전된 근대적 불교연구는 한국의 승려와 연구자들을 통해 한국의 근대불교학에 많은 영향을 주기도 했습니다. 다시 말해 고대에서 중세까지는 한국의 불교가 일본에 많은 영향을 미쳤다면, 근대 이후에는 일본 불교학계의 성과가 한국에 영향을 미쳤습니다.

한일 양국의 국교 수립 50 주년을 맞이한 오늘날, 한일 상호간의 이해와 국제적 수준에서의 공동연구, 불교문화의 활발한 교류 등이 절실히 요구된다고 하겠습니다. 뿐만 아니라 사회문제에 대한 불교적 해법 제시나 아픔과 고통 받는 사람들의 치유를 위한 공동 관심과 대처의 노력이 필요하다고 생각합니다.

한일 불교 교류 1500 년의 기억과 미래

宗浩 (이름 : 朴 文基)

들어가는 말

일본 류코쿠대학에서 세계불교문화연구센터가 설립된 것을 축하드리며, 한일수교 50주년을 맞이하여 센터 개소식을 기념하기 위해 열리는 심포지엄에서 기조강연을 맡게 된 것을 영광으로 생각합니다.

오늘 심포지엄의 주제는 “불교를 통한 한일문화교류의 역사와 전망”입니다. 그리고 한일 수교 50년을 기념하여 ‘함께 여는 미래’를 캐치프레이즈로 하여 다양한 기념사업이 추진되고 있다고 들었습니다. 오늘 심포지엄에서는 그 일환으로 삼국시대의 한일 불교교류, 고려대장경과 한일 불교교류, 신라의 원효와 가마쿠라시대 신란의 사상적 교감, 조선시대 개화기의 한일불교 및 현대의 한일불교 관계 등이 발표될 예정입니다.

각각의 주제 발표는 면밀한 연구 성과를 바탕으로 하여 한일 양국 불교의 미래적 비전을 제시할 것을 기대됩니다만, 저는 여기서 교류라는 측면에서 한일 불교 문화교류의 몇 가지 중요한 일면을 역사적 시간을 거슬러 기억해내고 이를 해석해 보고자 합니다. 또한 이러한 해석을 통해 한일 양국불교가 더욱 교류를 증진하여 함께 만들어 가야할 미래의 방향에 대하여 제 생각을 말씀드리고자 합니다.

일본에 불교가 최초로 수용된 것은 백제에서 건너간 불교가 공인된 538년의 일입니다. 다만 그 전에 도래인인 시바닷토(司馬達等)가 불상을 안치하고 예배했다는 기록이 전하는 것을 보면, 현재 한일 양국의 불교가 교류를 시작한지 어언 1500년이 되는 셈입니다.

비록 불교가 전래된 초기에는 승불파인 소가(蘇我)씨와 이에 반대하는 모노노베(物部)씨로 대표되는 귀족 대신들 사이에 불교 공인을 두고 대립이 있었다는 것은 모두가 아시는 사실입니다. 결국 승불파의 득세로 인해 백제로부터는 사원 건축기술 등이, 고구려로부터는 색채를 만들어 불화를 그리는 기술 등이 연이어 전래되었고, 일본에서는 이를 빠르게 흡수하였습니다. 이러한 사실은 720년에 편찬된 『일본서기』를 비롯하여 특히 가마쿠라시대 시렌(師鍊)스님이 편집한 『원형석서(元亨釋書)』나 교넨(凝然)스님이 저술한 『삼국불법전통연기(三國佛法傳通緣起)』 등에서 잘 볼 수 있습니다.

아스카시대 삼국불교의 전래와 교류

불교가 전래된 당초에는 당연히 스님들의 수계를 할 수 있는 제도가 마련되지 못했습니다. 이에 시바닷토(司馬達等)의 딸인 쯤신니(善信尼)와 3명의

비구니가 588년에 백제로 계율을 배우러 떠납니다. 이후 3년이 지난 후에 백제에서 돌아와 일본 불교계에 계율의 중요성을 인식시키고 계율제도가 점차 성립되어 갑니다. 이때를 아스카(飛鳥)시대 불교의 본격적인 서막이라고 볼 수 있을 것입니다.

이 당시 일본에서는 걸출한 불교 연구자가 등장합니다. 즉 일본에서 가장 유명한 불교학자 가운데 한 분인 쇼토쿠(聖徳)태자가 활동하였습니다. 쇼토쿠태자는 백제로부터 595년에 도래한 고구려 스님 혜자(慧慈)와 백제의 혜충(慧聰)스님을 스승으로 삼아 배웁니다만, 교리적 측면에서는 특히 혜자로부터의 영향이 많았을 것으로 추정되고 있습니다. 쇼토쿠태자는 하나를 배우면 열을 아는 사람이었습니다. 다음 일화는 쇼토쿠태자의 뛰어난 능력을 잘 보여줍니다.

스이코(推古, 재위 554-628) 천황 때에 일본으로 온 고구려의 혜자는 쇼토쿠태자의 스승이 되었습니다만, 태자는 혜자 스님에게 당시 일본에 전한 『법화경』에 한 글자가 빠져 있다고 말합니다. 이에 혜자는 고구려 본에도 그 글자가 빠져있다고 대답합니다. 이에 쇼토쿠태자는 선정(禪定)에 들어 중국으로부터 자신이 보았던 『법화경』을 가져와서는 전생에 보았던 『법화경』에는 이 한 글자가 들어있었다는 사실을 증명합니다. 이는 쇼토쿠태자의 능력을 전설로 만든 것으로 보이지만, 쇼토쿠태자가 『삼경의소』를 지었다거나 그에 깊이 관여하였다는 사실은 일본에 불교가 수입된 지 얼마 되지 않은 상태에서 일본불교가 양국의 문화교류에서 능동적 주체가 되었음을 보여주는 일화입니다.

이와 관련하여 쇼토쿠태자가 저술했다고 전하는 『승만경소(勝鬘經疏)』에 대해 주목할 필요가 있습니다. 당시 일본은 스이코 여제가 통치하고 있었고, 스이코 여제는 불교교류에 많은 관심을 보입니다. 3인의 비구니가 백제로 유학할 수 있었던 것도 이러한 일본의 정치 사정에 의한 것입니다. 여제와 비구니, 이 점에서 승만부인이 중심이 된 『승만경』이 일본에서 주목을 끌고도 남음이 있다는 연구도 있습니다. 이는 다름 아닌 일본이 이미 능동적으로 불교에 대해 해석하고 자체적으로 수용하였다는 증거이고, 물론 그것은 백제 및 고구려와의 긴밀한 불교교류의 결과라고 생각됩니다.

당시에는 한반도 삼국에서 일본에 도래한 인물들이 많았지만, 반대로 일본에서 백제로 귀화해서 백제 조정에서 활약한 이도 있었습니다. 일라(日羅)가 바로 그 장본인입니다. 일라는 『일본서기(日本書紀)』에 따르면 센카(宣化, 535-539) 천황 때에 백제로 건너간 일본 관리의 아들로써 백제에서 달솔(達率)이라는 두 번째로 높은 관직에 있었습니다. 일라는 일본 조정의 요청으로 비다츠(敏達) 천황 12년인 583년에 일본으로 되돌아오게 됩니다. 그 때 일라와 쇼토쿠태자 사이에 있었던 다음과 같은 일화가 전합니다.

당시 쇼토쿠태자는 일반인 복장을 하고 있었는데 일라가 태자를 가리키며

“신인(神人)이다.”라고 했고 더 나아가 “세상을 구할 관세음보살이다.”라고 하였습니다. 일라도 얼굴에서 빛을 내었고, 태자도 미간에서 빛을 발하여 서로가 통하는 뛰어난 인물이었다고 묘사되었을 정도로 두 사람은 매우 뛰어난 불교자였던 것입니다. 물론 여기서는 쇼토쿠태자가 훌륭한다는 사실에 중점이 두어져 있습니다. 하지만 일라의 활동에 초점을 맞추면, 백제로부터 불교가 전래된 직후 한일 양국의 인적 교류 및 문화교류가 매우 활성화되었음을 알 수가 있고, 그 일환으로 활발한 불교교류를 해석해야 함을 우리에게 알려주는 일화일 것입니다.

또한 고구려에 유학 간 스님으로 교젠(行善)을 들 수 있습니다. 그는 고구려에 머물면서 불학을 익히고 법을 구하였는데, 고구려 멸망 후 당(唐)으로 갔다가 719년에 배를 얻어 타고 다시 일본에 돌아옵니다. 그는 고구려에 있을 때 갑자기 큰 홍수를 당했는데, 다리는 무너지고 배도 없어서 홀로 있다가 마음속으로 관음을 염하였더니 잠깐 사이에 한 노인이 작은 배를 저어 와서 그를 실어 강기슭에 내려 주었다고 합니다. 교젠이 감사의 인사를 하려 하는데 노인과 배가 모두 사라졌고, 그는 이를 계기로 관음상을 만들어 예경하였으므로 고구려에서는 그를 하변보살(河邊菩薩)이라고 칭했다고 합니다. 교젠 스님은 일본에서도 존경을 받아서 그가 가지고 온 관음상을 나라 코후쿠지(興福寺)에 안치하였다고 합니다. 고구려에서 그가 보살로 불렸다는 것은 그의 인품과 교화로 인한 고구려인의 감화가 그만큼 컸다는 것을 보여줍니다.

나라시대 삼국불교의 전래와 교류

일본이 도읍을 아스카에서 나라로 옮기는 710년은 한반도에서 고구려와 백제가 이미 없어지고 신라가 삼국을 통일한 지 40년이 넘는 때입니다만, 이후 신라와 북방의 발해(渤海)가 서로 대치하며 각각 뛰어난 불교문화를 형성하게 됩니다.

나라시대에는 남도 6종(南都六宗)의 교학전통이 확립되는데 남도 6종의 성립과 이전 한반도 삼국의 불교는 상당히 깊고 밀접한 관계였음이 많은 연구에 의해 밝혀져 있습니다. 쇼토쿠태자의 스승인 혜자와 혜충은 삼론(三論)과 성실론(成實論)에 정통한 스님이었는데, 아마도 일본의 삼론종과 성실종은 이때부터 시작된 것으로 보입니다. 또한 뒤에 백제 출신인 도장(道藏) 스님은 『성실론소(成實論疏)』를 저술하여 후대에 많은 영향을 미쳤습니다. 이 문헌은 불행히도 남아 있지 않지만, 백제에서 가져온 교리 지식과 일본에서 얻은 지식을 망라하여 저술했을 것으로 보입니다. 따라서 8세기 일본불교의 학문적 수준은 중국이나 신라와 비교해도 결코 뒤떨어지지 않았을 정도였다고 생각합니다.

한편 계율종은 백제와 관련이 깊고 법상종은 신라와 관련이 있습니다만, 특히 일본 화엄종의 성립은 신라와의 관계를 떠나서 생각할 수 없습니다. 일본

화엄종 개창의 토대를 닦은 신쇼(審祥)는 전에는 신라스님 심상으로 알려져 왔지만, 최근에는 신라에 유학한 일본스님이라는 설이 더 설득력을 얻고 있습니다. 그에 대해서는 당의 화엄학자 법장(法藏)에게 수학한 후 신라에서 공부하고 일본으로 왔다는 전승이 있습니다. 그는 740년에 도다이지(東大寺)에서 일본 최초로 『화엄경』 강의를 합니다. 이후 일본에서는 750년경에 지쿄(智憬) 스님이 법장의 『화엄오교장(華嚴五教章)』 주석서를 저술할 정도로 교학에 대한 흡수력이 상당히 빨랐습니다. 비록 이 저술은 남아있지 않지만, 아마도 당시 신라의 유력한 학생이자 거사였던 원효(元曉)스님의 영향력이 컸다고 생각됩니다. 그가 원효의 『무량수경종요(無量壽經宗要)』에 대한 주석을 남긴 것에서도 이 사실을 알 수 있습니다. 또한 그는 화엄학에 해박한 식견을 가져서 신라와 중국 승려에 대해 비판적 관점으로 주석서를 썼다고 추정됩니다. 이러한 경향은 그가 저술한 『대승기신론동이략집(大乘起信論同異略集)』에서 『기신론』을 통해 신유식인 법상유식학을 비판하는 자세에서도 읽을 수 있습니다. 하나의 예에 불과하지만 나라시대에는 중국과 신라의 불교문헌을 적극적으로 필사하고 연구하면서 독자적인 불교사상을 형성해 나갑니다.

아스카시대부터 나라시대에 걸쳐서 한반도로 유학을 간 일본스님들은 적지 않은 것으로 생각됩니다. 이는 바로 한일 양국의 불교문화 교류가 매우 활성화되었음을 의미합니다. 그 중에는 중국에 유학을 가거나 신라에 머물다가 신라사를 통해 귀국하는 스님들도 여럿이 있습니다. 비록 몇 개의 단편적인 기록만 전하고 있어서 양국 불교교류의 구체적 실상을 제대로 알 수 없습시다만, 그들은 중국의 선진 불교문화를 신라에 전하고, 신라에서 다시 일본으로 돌아옴으로써 당, 신라, 일본의 당시 동아시아 세계에서 불교교류의 메신저 역할을 하였다고 생각합니다.

헤이안시대 이후 불교 교류와 문헌 전래

8세기 말부터 약 400년간 지속된 헤이안시대에는 기록상으로 아스카시대와 나라시대만큼 한일 양국의 불교교류가 활발하지는 않은 듯합니다. 그러나 삼국불교의 일본 전래와 문헌 및 사상적 영향을 바탕으로 한일 양국 불교의 인정(人情)이 서로 교차하고 교감하는 시대였다고 말할 수 있습니다. 우선 신라불교를 대표하는 원효의 후손 설중업(薛仲業)이 일본에 사신으로 갔을 때 원효의 『금강삼매경론』을 읽어본 일본의 한 진인(真人)이 원효를 기리며 설중업에게 시를 써주었다는 기록이 전합니다. 이 일을 계기로 신라에서는 9세기 초에 원효의 비문인 「서당화상비」가 세워졌습니다. 이처럼 이 시기에는 양국 불교의 인정적 교감을 통해 불교문화의 교류와 전승이 이루어졌다고 할 수 있습니다.

또한 사료의 부족 때문에 다양한 실상이 드러나지 않고 있지만, 발해의 승려가 일본 승려의 제자가 되거나 신라 승려가 일본 승려의 저술을 공부하고 사상적

영향을 받아서 인용할 정도로 양국의 불교교류는 끊임없이 이어졌습니다. 발해의 승려로서 일본과 불교교류를 한 이로는 정소(貞素) 스님을 들 수 있습니다. 그는 일본의 레이센(靈仙) 스님의 제자입니다. 레이센은 일본에서는 유일하게 삼장(三藏)의 칭호를 받은 스님이라고 합니다. 그는 반야삼장(般若三藏)의 역장(譯場)에서 『대승본생십지관경(大乘本生十地觀經)』을 번역하는데 참여하여 필수(筆受)와 역어(譯語)를 담당하였는데, 이를 통해 그가 범어에 능통했음을 알 수 있습니다. 그의 제자인 정소 스님은 발해 사신과 함께 일본에 왔는데 일본 조정에서는 그를 통해 레이센 스님의 유학비를 보내줍니다. 레이센스님은 그에 대한 보답으로 불사리 1만과 등을 정소를 통해 일본 조정에 다시 보냅니다. 하지만 정소스님이 일본 조정의 심부름으로 다시 스승을 찾아 오대산(五臺山)에 갔을 때는 레이센 스님이 이미 독살된 후입니다. 정소 스님이 침통한 마음을 담아 남긴 글과 시구는 엔닌(圓仁) 스님의 『입당구법순례행기(入唐求法巡禮行記)』에 전하고 있습니다. 한일 양국의 불교문화 교류는 이들 사제 간의 인정을 통해 더욱 깊어진 모습을 볼 수 있습니다. 물론 앞서 나라시대 때 삼국에 구법 유학을 했던 승려들 사이에서도 이러한 사제 간의 깊은 인정이 있었을 것으로 생각됩니다.

이러한 사례와 같이 중국에서 양국 사이의 불교교류가 또한 빈번했을 것으로 생각됩니다. 앞서 608년에 견당사로 중국의 장안(長安)에 갔던 일본 승려 니치몬(日文) 스님의 경우 632년에 일본에 귀국합니다만, 당시 수 또는 당에 유학했던 고구려 승려 혜관 스님과의 교류도 주목해 볼 수 있습니다. 혜관 스님은 니치몬 스님과 교류하였고 그 교류의 결과 625년에 직접 일본에 가게 된 것이 아닐까 추측하는 연구도 있습니다. 더욱 확실한 예는 조금 앞에서 언급했던 엔닌 스님이 당에 있는 신라 적산원(赤山院)에 머물면서 양국의 불교에 대해 의견을 교환한 사실을 들 수 있습니다. 이러한 경우는 중국에서 일본과 신라 간의 불교교류가 이루어진 셈입니다.

신라 승려 견등(見登)의 저술인 『화엄일승성불묘의(華嚴一乘成佛妙義)』에서 8세기 말 일본의 화엄종 승려 주례(壽靈)의 『오교장지사(五教章指事)』를 주요 전거로 인용한 사실은 일찍이 밝혀졌습니다. 8세기 말 일본의 화엄학 수준은 그 원류인 당이나 신라의 화엄과 어깨를 나란히 하는 차원을 넘어 역으로 영향을 미치는 수준에 도달했음을 말해줍니다.

한편 헤이안시대 말기에는 고려의 왕자 출신 화엄종 승려 의천(義天 1055-1101) 스님이 선현들의 전적을 수집하기 위해 송, 요, 일본 등에 편지를 써서 불교문헌을 대대적으로 구합니다. 의천스님이 활동하던 11세기 후반에는 동아시아 세계에서 문헌을 통한 불교 문화교류가 매우 활발했던 시대입니다. 이는 인적 교류와 상호 정보교류 또한 매우 활성화되었음을 의미합니다. 비록 의천 스님이 일본에 편지를 보낸 후 그 결과가 어떻게 되었는지는 알려져 있지

않았지만, 아마도 많은 도움을 받았으리라 추측됩니다. 일본 또한 의천이 정리해 놓은 화엄관련 저술 집성인 『원종문류(圓宗文類)』를 통해 새로운 문헌들을 접하고 연구하게 됩니다. 뿐만 아니라 1087년에 완성된 고려의 초조대장경(初彫大藏經)도 이미 일본에서 다량 유통되었고, 의천이 간행한 교장(敎藏) 문헌과 그 목록인 『신편제종교장총록(新編諸宗教藏總錄)』도 일본에 전해집니다. 이렇게 한일 간의 불교 문화교류가 지속되면서 고려시대 보조 지눌(普照知訥, 1158-1210)의 문헌도 일본에서 유통되고 연구된 사실이 확인되며 이들 문헌들은 가마쿠라시대까지도 영향을 미치게 됩니다.

무로마치시대와 에도시대 조선불교와의 교류

무로마치시대(室町時代 1336-1573)가 되면, 대장경판을 얻으려는 일본 측의 노력이 결실을 맺어 고려시대의 재조대장경(再彫大藏經)이 일본으로 다량 유통됩니다. 이후 에도시대(江戸時代 1603-1867)에는 양국의 공식적인 불교문화 교류를 상정할 수 없는 것이 현실입니다. 당시 조선은 유교를 숭상하는 유교국가였기 때문입니다. 물론 조선시대에도 불교는 존속하였고 많은 사찰들에서 불교신앙과 의례, 불교서적의 간행이 활발히 이루어졌습지만 국가 차원의 공식 교류는 물론 인적 교류 또한 상당히 제한적이었습니다.

다만 1592년의 임진왜란과 이후 국교 교섭 과정에서 의승장(義僧將)과 강화사(講和使)로 활약한 사명 유정(四溟惟政, 1544-1610) 스님이 일본 승려들과 교류한 흔적은 있습니다. 또한 그의 스승인 서산(西山)대사 청허 휴정(淸虛休靜, 1520-1604) 스님의 저술 『선가귀감(禪家龜鑑)』이 1629년 일본 스님 지운(自雲)에 의해 전래되어 1635년에 처음 판각된 이래 몇 차례 간행되고 그에 대한 주석서가 일본에서 나오기도 했습니다. 이는 일본 임제종(臨濟宗) 측의 노력에 의한 것입니다만, 사명 유정 스님이 매개가 되었을 것으로 추정됩니다.

한편 불교와 직접적인 관련은 없지만 1607년 에도막부와 조선의 국교가 회복된 이래 1811년까지 200여 년간 12차례에 걸쳐 일본에 건너간 조선통신사(朝鮮通信使)는 일종의 문화사절단으로서 쇄국시대임에도 양국 사이의 문화교류가 지속되었음을 보여줍니다. 임진왜란을 통해 조선의 도자기와 인쇄술, 의학과 유교 등이 일본에 전해졌고 또 조선통신사를 통해 일본에서 인쇄문화와 차문화가 발달하였음을 조선사람들이 알게 되었습니다. 그리고 통신사와 교류했던 일본 스님들의 자취도 찾을 수 있습니다.

이처럼 무로마치시대부터 에도시대에 걸친 시기에는 한일 양국의 불교문헌 교류 및 유통이 가마쿠라시대 이전에 비해 현저히 줄어들게 됩니다. 다만 현재 동국대학교에는 『원형석서(元亨釋書)』의 조선 개판본(改版本)이 존재합니다. 동국대학교의 전신인 중앙불교전문학교(中央佛敎專門學校) 및 혜화전문(惠化專門)에 교수로 재직하던 에다 토시오(江田俊雄) 선생에 따르면, 이 책은 1381년에서

1592년 사이에 조선에서 개관되고 연구되었다고 합니다. 그 외에 19세기 중반 이전 조선에 수입된 일본 불교문헌의 예는 현재로서는 더 이상 찾을 수 없지만, 조선과 에도시대 불교의 비교 연구와 문헌 발굴을 통해 새로운 자료와 문화교류의 양상을 확인할 수 있게 되기를 바랍니다.

일본의 근대불교학과 한국불교

문화는 수용과 유통을 거치면서 교류되고 역수입되기도 합니다. 특히 한일 양국의 불교 교류가 그렇습니다. 일본은 메이지시대 이후 학문적으로 근대적인 불교연구가 진전되었고 그 연구수준은 세계적 수준에 이르러 오늘날까지 놀라운 성과를 축적해 왔습니다. 이는 19세기 후반부터 이루어진 유럽 유학을 통해 범어 등 불교 사본을 섭렵하고, 서양이 가지지 못한 한문 원전 독해 능력을 통해 서구 불교학계의 한계를 넘어설 수 있었기 때문입니다. 근대 일본 불교학계의 최대 성과 가운데 하나는 『대정신수대장경』과 같은 교감본 대장경을 집성한 것이고 이는 메이지시대 이후 일본의 근대 불교학이 이루어낸 중요한 결실이었습니다.

그러나 저는 정토진종(淨土眞宗) 서본원사(西本願寺)의 오타니 코즈이(大谷光瑞)가 중심이 된 오타니 탐험대가 이룬 성과야말로 불교에 대한 열정 하나로 이루어낸 사건이며 일본 근대불교의 자랑할 만한 상징이라고 생각합니다. 어쩌면 오타니 코즈이가 지리학자였기에 가능한 일이었겠지만, 이는 거시적 관점에서 불교 동점의 역사와 그 궤적을 탐사하는 시도였습니다. 또한 미래 한일 양국의 불교교류의 방향성을 고려할 때도 주목해 보아야 할 원대한 시도였다고 생각됩니다.

근대에 들어 일본은 오타니 탐험대에서 볼 수 있는 것처럼 세계적 시야와 그에 상응하는 실력을 가지고 불교연구를 수행해왔습니다. 이는 서양학계에서는 불모지와 다름없던 한국불교에 대한 연구 성과로 이어졌습니다. 한국불교에 대한 근대기 일본학계의 대표적 성과로는 다카하시 토오루(高橋亨)의 『이조불교(李朝佛敎)』(1929), 누카리야 가이텐(忽滑谷快天)의 『조선선교사(朝鮮禪敎史)』(1930)를 들 수 있습니다. 또한 오오야 토쿠조(大屋徳成)는 그의 박사학위 논문으로 『고려속장재조고(高麗續藏藏雕造攷)』(1937)를 제출하여 현재까지도 이 분야의 불후의 성과로 남아 있습니다. 그 외에도 에다 토시오의 연구 성과를 모은 『조선불교사의 연구(朝鮮佛敎史の研究)』(1977), 가마다 시게오(鎌田茂雄)의 『조선불교사(朝鮮佛敎史)』(1987) 등 한국불교에 대한 많은 연구가 이루어졌습니다. 그리고 일본에서의 한국불교연구 성과는 지난 2000년 일본의 한국유학생들이 정리하여 『일본의 한국불교 연구동향』이라는 책으로 간행한 바 있습니다.

이에 비해 한국불교는 500년간의 조선시대에서 비주류의 위치에 있었고 근대기에는 식민지가 됨에 따라 불교와 한국불교에 대한 학문적 연구를 체계적으로 수행할 수 있는 여건이 되지 못했습니다. 그나마 많은 승려와 연구자들이 근대기에 일본에

유학하고 일본 불교학계의 성과를 접하면서 일본을 통해 역수입된 근대불교학의 영향을 받아 학문의 기초를 닦을 수 있었습니다. 한국에서 불교학은 1960년대 이후에야 제자리를 찾게 되었고, 그 과정에서도 일본에서 나온 선행연구에 힘입은 바가 컸던 것이 사실입니다.

다만 최근에는 한국도 불교학의 수준이 이전에 비해 높아졌고 한국불교뿐 아니라 일본불교에 대한 관심과 연구도 높아지고 있음은 고무적인 일이 아닐 수 없습니다. 교류는 상호간의 올바른 이해와 호혜평등의 원칙에서 출발해야 하기 때문입니다. 지금까지 한일 불교교류의 역사적 기억에 대해 시대별로 언급하였는데, 고대에서 중세까지는 한국의 불교가 일본에 많은 영향을 미쳤다고 한다면, 근대 이후에는 일본 불교학계의 성과에 기반하여 한국불교 연구가 활성화되었음을 부인할 수 없습니다. 이는 문화의 수용과 전달, 교류와 유통, 역수입과 새로운 비전 창출의 전형적 사례일 것입니다.

한일 불교교류의 미래적 전망

1965년에 한일양국은 다시 국교를 수립하였고 올해는 국교 수립 50년, 나아가 해방(일본에서는 종전) 이후 70주년을 맞이하는 해입니다. 그 사이 임진왜란 후 재차 국교를 재개한 조선과 에도막부의 과거 기억에 비해 더욱 밀접하고 다방면에 걸친 실질적 교류의 장이 한일 양국 사이에 펼쳐져 왔습니다. 그리고 동국대학교와 류코쿠대학 사이의 정기적 연구자 교류가 시작된 지도 벌써 9년이 되었습니다. 이 시점에서 한일 양국의 불교는 어떤 미래를 준비하고 전망해야 할까요? 오늘 류코쿠대학의 세계불교문화연구센터 설립 기념 심포지엄을 계기로 한일 양국의 불교교류의 미래를 다시금 생각해보고자 합니다.

저는 이 자리에서 학문연구와 사회적 환원이라는 두 차원에서 상호간의 이해와 국제적 수준에서의 공동연구, 불교문화의 활발한 교류가 절실히 요구된다고 생각합니다. 먼저 연구 분야에서는 인도불교와 중국불교, 그리고 한국과 일본불교의 연구에 이르기까지 많은 분야에서 공동의 이해에 기반한 공동연구가 가능하리라 생각됩니다. 현실적으로 가능한 분야를 좀 더 구체적으로 말씀드리자면, 우선 일본 소재 한국불교문헌을 공동으로 연구하는 것을 제안할 수 있습니다.

주지하다시피 일본은 신라에서 고려에 이르는 고대와 중세 한국불교문헌의 목록 및 사본의 최대 소장처입니다. 류코쿠대학만 해도 신라시대 찬술문헌 18종, 고려시대 찬술문헌 1종을 소장하고 있으며 이는 일본에서 필사되거나 판각된 한국불교문헌입니다. 예를 들어 신라의 유식학자인 원측(圓測)의 『해심밀경소(解深密經疏)』 사본, 원효(元曉)의 『대혜도경종요(大慧度經宗要)』 사본뿐만 아니라, 경흥(憬興), 승장(勝莊), 의적(義寂), 표원(表員), 태현(太賢), 그리고 고려시대 의천(義天), 요원(了圓)의 책 사본이나 판본이 소장되어 있습니다. 또한 조선시대 불교 문헌이나 20세기 초 한국에서 인출된 문헌도 몇 종 있습니다.

현재까지 이루어진 한일 불교학자의 공동연구에서도 그전에 알지 못했던 새로운 자료를 발굴하고 사실을 규명하여 큰 성과를 도출해 내었습니다. 예를 들어 오랜 기간법장의 저술로 알려져 왔던 『화엄경문답(華嚴經問答)』은 일본의 화엄연구자인 가마타시게오(鎌田茂雄) 선생, 요시즈 요시히데(吉津宜英), 이시이 코세이(石井公成) 교수, 한국 동국대학교의 김상현(金相鉉) 교수가 서로 학문적 교류를 이루면서 결국 신라 의상(義相, 義湘) 스님의 화엄 강의록으로 판명될 수 있었습니다. 또한 동국대학교의 최연식(崔鉉植) 교수 또한 위 연구자들과의 교류를 통해 신라 견등(見登) 스님의 『기신론동이약집(起信論同異略集)』이 사실은 일본스님 지교(智憬)의 저술이라고 확정할 수 있었습니다. 이 외에도 많은 사례가 있겠지만 향후 공동연구를 통해 불교의 역사와 문화, 사상과 수행 등 여러 분야에 걸친 새로운 지평을 열 수 있다고 생각합니다.

이처럼 일차적으로는 문헌서지학이나 사상사적으로 중요한 의미가 있는 일본 내 한국불교문헌들을 한일 연구자가 공동으로 연구해 간다면 이는 불교의 새로운 미래를 여는 중요한 첫걸음이라고 생각합니다. 이를 위해서는 일본 소재 경론의 사본과 한국에 있는 간본들과의 엄밀한 비교연구가 필요할 것이며, 오늘 심포지엄에서도 이와 관련된 발표가 있는 것으로 알고 있습니다. 이번 심포지엄을 계기로 상호 공동연구가 더욱 진전되기를 기대합니다.

그리고 불교의 사회적 환원 측면에서 말씀드리자면, 일본불교계는 몇 년 전 일어난 불행한 대지진의 피해자분들을 위로하고 상처를 치유하기 위해 사회적 활동에 적극적으로 참여하고 있는 것으로 알고 있습니다. 한국에서도 최근에는 인간의 행복, 마음의 치유, 재능 기부 등 불교가 할 수 있는 사회적 역할에 대해 관심을 갖고 있습니다. 즉 사람들이 괴로움을 잊고 마음의 안정과 행복을 얻을 수 있도록 오랜 역사를 지닌 불교 수행과 치유의 전통을 적극적으로 사회에 환원해야 하는 시대에 와 있습니다. 사회문제에 대한 불교의 대응방식, 재능의 사회적 환원에 대해서도 공통의 관심을 갖고 대처하고 준비한다면 이는 세계불교의 조류를 선도하는 뜻 깊은 의미를 지닐 수 있을 것입니다.

오늘 두 대학 사이의 오랜 인연을 기반으로 한일불교 교류 1500 년의 의미를 말씀드릴 수 있게 되어 무척 기쁘게 생각합니다. 향후 한일 양국 불교계와 학계, 좁혀서는 동국대학과 류코쿠대학이 힘을 모아서 1500 년 간의 화려했던 불교교류의 기억을 오늘에 되살려 새로운 미래를 힘차게 열어갈 수 있기를 기원하면서 기조강연을 마치고자 합니다. 긴 시간 경청해 주셔서 감사합니다.